

▽地域の明日を拓く△

# 地域課題と向き合い、 起業家マインドを学ぶ

▽岩手大学学内カンパニーとは

岩手大学の学内カンパニー活動は、2009年から始まり今年度は11年目に当たる本学独自の教育改善プログラムです。

活動の主旨は、「ベンチャー立ち上げにも繋がりを有する実践的な取り組み」、「地域性、社会貢献性が高い取り組み」、「地域企業等との連携によるものづくり、製品開発」です。学生は活動に従事した労務費を支給されるので、手なアルバイトを行うよりも自分の将来に向けた取り組みを一生懸命行うことにより、スキル・技術を磨くことができます。一方で、事業報告の義務があるなど経営責任といった緊張感があります。

今年度は、13のキャンパニーに86名の学生が参加し、活発な活動を行っています。

▽学内カンパニー「工房彩縁」  
ができるまで〔背景〕

学内カンパニー「工房彩縁」は、岩手県沿岸北部の洋野町特産であるウニの殻を有効利用し、殻から抽出した色素によりハンカチを染め、地元の水産会館に委託販売しているカンパニーです。ウニ染めの技術は地元の方々や企業に提供し、地場産業として定着させ、地域活性化に貢献することを狙っています。

弊社は前代表が起業した学内カンパニーです。彼女の地元である洋野町は岩手県内でもウニ漁が盛んな地域の一つであり、養殖も盛んです。岩手県では年間約1000トンのウニを漁獲し、そのうち100トンはウニ丼などの食用として身が使用されますが、残りの



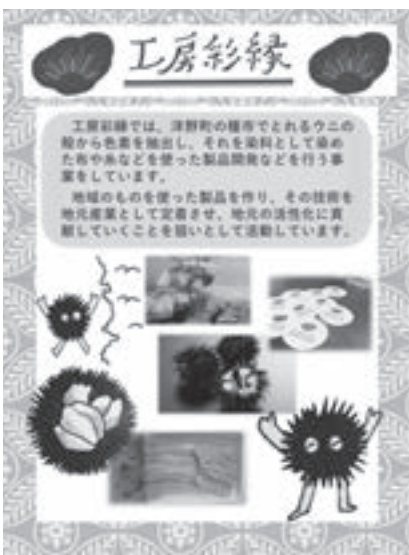
学内カンパニー工房彩縁  
代表

あおい 碧  
吉野

(岩手大学人文社会科学部4年)

900トンは殻などで産業廃棄物として処分されてしまいます。つまり、ウニを漁獲しても、9割は捨てられてしまうのです。このウニ殻の処分にはお金がかかり、漁師さんにとって痛手となっています。

そこで、処分されてしまう殻を活用して何か商品価値を生み出せないか、ということ「工房彩縁」は誕生しました。



2018年度成果発表会パネルから



ウニ染めハンカチと小物類



### ▽ウニ染めハンカチについて

この活動を行うにあたっては、宮古市出身の染色家、アトリエぐらん代表の田川宮子先生との出会いがありました。先生はウニ染めの先駆者として活動され、世界初のウニ染め技術をお持ちです。その技術によるウニ染めの魅力を感じ、技術を継承していくことも活動の目的の一つとし、またウニ染めには高い希少性があるため、ウニ染めのハンカチによる商品価値を生み出すことを目指しました。

活動当初はどのような生地でハンカチを製

作するか実験を幾度も行いました。本学教育

学部被服学専門の天木桂子教授にも助言をいただき、比較的染まりやすい動物性繊維である絹でウニ染めハンカチを製作することになりました。絹の素材はやや光沢感があり、高級感があります。市販の綿やタオル素材でできたハンカチに比べ日常使用するには多少抵抗感があるかもしれませんが、希少性の高いウニ染めハンカチにはびつたり素材になります。また、吸水性、速乾性も兼ね備えているため、使用しやすいものになります。2018年の8月からは、洋野町水産会館ウニークにて販売を開始しています。

### ▽大船渡ビジネスプランコンテストへの参加

これまで洋野町を中心に行ってきたウニ染めハンカチの認知を三陸中心に岩手県全体に広め、染色方法について再検討をするため、今年の1月に開かれた大船渡ビジネスプランコンテストに参加しました。

このコンテストは、起業や新たな事業展開に対する意欲の向上、潜在的なビジネスプランの発掘とその具現化の促進、魅力あるまちづくりと地域創生の一助を目的とし、高校生から企業まで幅広い団体が応募し、魅力的なアイデアを発表しています。互い

のビジネスプランを知ることにより、自分たちのアイデアを見つめ直すことができるとの機会でした。このコンテストでは、大学生の部で優秀賞をいただくことができました。

### ▽今後の活動（地域との関わり方）

ハンカチの販売が2年目となった今、新たな素材でのハンカチ製作に取り組んでいます。

現在、より幅広い世代の方に手を取ってもらうことを狙いとし、自社のウニのキャラクターのワンポイント刺繍をつけたガーゼタオルハンカチの商品作りに取り組んでいます。また、ハンカチで染めた後廃棄してしまうウニ殻をさらに何か有効活用できないか、というところで、堆肥化なども視野に入れ、活動の幅も広げる予定です。さらに、より生産性を上げるために、染色に有効なウニ殻の棘だけを採取する方法を研究している最中です。ウニの漁獲期間は短く限られるため、棘だけを採取し、粉末化による長期保存を目指しています。

そして、委託販売先のお店も増やし、より多くの方にウニ染の魅力を伝え、洋野町を始め三陸の地場産業として定着させられるように、今後もさらに精進してまいります。